

宮澤賢治『春と修羅』を読む

—「青い槍の葉」について—

黒澤 勉

△青い槍の葉▽

『春と修羅』の「グランド電柱」として一括された二十一編の詩の四番目に「青い槍の葉」と題する一編がある。それを次に引いてみる。

青い槍の葉

(mentalsketchmodified)

① (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

雲は来るくる南の地平

そらのエレキを寄せてくる

鳥はなく啼く青木のほづえ

くもにやなぎのかくこどり

② (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

雲がちぎれて日ざしが降れば

黄金キンの幻燈げんたう 草くさの青

気圏日本のひるまの底の

泥にならべるくさの列

③ (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

雲はくるくる日は銀の盤

エレキづくりのかはやなぎ

風が通ればさえ^ぎえ鳴らし

馬もはねれば黒びかり

④ (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

雲がきれたかまた日がそそぐ

土のスープと草の列

黒くをどりはひるまの^{とうろ}燈籠

泥のコロイドその底に

⑤ (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

りんと立て立て青い槍の葉

たれを刺さうの槍ぢやなし

ひかりの底でいちにち日がな

泥にならべるくさの列

⑥ (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

雲がちぎれてまた夜があけて

そらは黄水晶^{シトリン}ひでりあめ

風に霧^{シトリン}ふくぶりきのやなぎ

くもにしらしらそのやなぎ

⑦ (ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

りんと立て立て青い檜の葉

そらはエレキのしろい網

かげとひかりの六月の底

気圏日本の青野原

(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

(注) 解説の便宜のために全体を七節に分かつ番号を付した。それ以外はルビも含め、すべて初版本の『春と修羅』によった。タイトルの次の括弧書きの英語は単語ごとのスペースをとっていないが、これは誤植であろう。「原体剣舞連」という詩にもこの言葉が記されているが、そこでは (mental sketch modified) となっている。この例でもわかるように『春と修羅』初版本には誤植が散見し、ルビの明らかな間違いもある。そもそも、なぜこんな言葉にルビを施しているのかと疑問な箇所もある。

一、この詩の作られた日

一九二四(大正十三)年四月二十日、自費出版された心象スケッチ『春と修羅』末尾には、それぞれの詩の題と製作された日、目次が記されている。それによるとこの詩は二重括弧で(一九二二・六・一二)とあり、一九二二

(大正十一)年の六月十二日に作られたことがわかる。賢治はこの時二十六歳、稗貫農学校の教師となったのが前年の十二月三日のことだから、教師となって約半年後の作である。後述するように、この詩が作られたモチーフ(動機)として、賢治がこの時、農学校の教師であった、という事実を無視できない。

二、「青い槍の葉」とは

「青い槍の葉」とは何だろう。それがわからなければこの詩は全くわからない。ある意味でこの題は、一種の「謎かけ」ともいえる。この謎は、さ程難しいものではない。「泥にならべる草」「土のスープと草の列」「りんど立て青い槍の葉」などという表現から、稲、しかもまだ田に植えて間もない頃の早苗である(賢治のころには五月二十日ごろ、種子である籾を苗代で育て、それが十五センチ位に伸びたものを株分けして、田に移植する。これが田植えである)。花巻のあたりの田植えは、六月中旬ごろに行われていた(現在は一ヶ月程早くなっている)。詩の作られたのは六月十二日であり、この点からいっても田植えの終わって間もないころの(苗床から移植されたばかりの)早苗と考えられる。

まだ植えたばかりの早苗は、当然のことながら、根付いていないので水に溺れるように立ち、いかにも頼りない。そういう早苗に対して、しっかりと根を下ろして、立つがよい、と励ますように語りかけているのである。賢治はその作品の中で、このように稲や草木、小鳥などにも人間のように親しみをもって呼びかけ、語る詩人であった。

稗貫農学校では、実習として稲作があり、賢治の担当科目の一つだった(他に、代数、農産製造、作物、化学、英語、土壤、肥料、気象などの科目を担当したという)から、生徒達と一緒に田植えをした後、この詩を紹介した

ものと思われる。

「稲の詩人」(『宮澤賢治語彙辞典』による)であった賢治は、詩や童話の中でしばしば稲を取り上げている。賢治の生涯そのものが、稲作農民のために献身し、その果てに病いに侵されるという悲劇的なものであった。この詩は、稲を詠んだ賢治最初の作品であり、単に田園の風景を観賞するといった詩ではなく、稗貫農学校での稲作体験が根底にあり、農業の教師としての姿勢が反映している。

賢治の最後の作品も「方十里みかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる」^{いたつき}「病のゆゑにもくちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし」という辞世の短歌二首であり、豊作の喜びを詠んでいる。

三、この詩の構成―展開

この詩は「ゆれるゆれるやなぎはゆれる」という括弧書きの言葉が八回も繰り返され、その後四行を一かたまりとして、水田とその背景として広がる空が描写されている。

この「やなぎ」は、ギンドロヤナギ(ドロノキ。銀白楊。セイヨウハコヤナギの一種でウラジロハコヤナギ)だと思われる。「ぶりきのやなぎ」という言葉に最もふさわしいのは、その葉裏が白く、風に吹かれて緑(葉の表)と白(裏)に一斉にきらめくギンドロヤナギだからである。よく知られているように、賢治はギンドロヤナギを好んだ。この詩は垂直に、高くそびえて、葉裏の白くきらめくギンドロヤナギと、広く水平に広がる水田、その背景としての空を配したもので、視覚的、絵画的なイメージ構成をもっている。

一方でまたこの詩は七七調や七五調を基本とし、口語ながら定型詩に近いリズムがある。おそらく賢治自身、幾

音も口ずさんで調子をとりながら作ったであろう。この詩に賢治が曲をつけていたことを思いあわせると、この「ゆるゆるるやなぎはゆるる」は、民謡の間（あい）の手の歌、掛け声とも考えられる（後述）。

さらに「ゆるゆるるゆるるやなぎはゆるる」という八回にわたって繰り返されるフレーズで、視点を転換し、多角的な視点から稲や田圃、空や雲を描いた、とみることもできる。このフレーズをもとにして詩の内容を分かつと、この詩は七節に区切られる。それぞれの内容をまとめてみると次のようになる。

①節 雲が南の方から流れ、やなぎの天辺でかっこうが鳴いている。（情景）

②節 雲間から日が射し、植えられたばかりの青田に陽ざしが降り注いでいる。（情景）

③節 雲は流れ、かわやなぎは風にざわめき、馬が黒光りして跳ねている。（情景）

④節 再び雲間から日の光が射し、田圃に働く人の姿が水田に影となって映っている。

⑤節 植えられたばかりの、まだ幼く、弱い早苗よ、りんと立て、陽ざしを浴びて、と思いを述べる。

⑥節 雲が途切れると夜明けのように日が射し、日照り雨となる。やなぎの葉裏も、霧吹く中でひらめいている。

（情景）

⑦節 早苗よ、りんと立て、雲の力、光のエネルギーを受けて、この広がる青田の中で、と思いを述べる。

四、①節の注解

○「雲は来るくる南の地平」―南の方の地平線の彼方から雲がやってくる、と雲の流れる様子を描いたもので、七音七音と重ね、名詞止めになっている。「来るくる」と二度繰り返してリズムカルに、軽やかに表現したが、「くる

くる」では「来る」という意味が伝わりにくく、「来る来る」では漢字が重すぎてリズムが消えると考えたのであろう。ところが③節では「雲はくるくる」とすべて平仮名表記になっているが、これは「来るくる」と表記するはずだったのでないだろうか。

○「そらのエレキ」―雷雲が静電気を帯びていることをいったものである。「日下りの化学の室の十二人イレキを帯びし白金の雲」「ひるすぎのといきする室の十二人イレキを含む白金の雲」（ちくま文庫、『宮澤賢治全集』の短歌番号三八。「大正五年三月より」と題してまとめられたもの一編）という短歌も賢治にある。

神社などでみる注連縄しめなわに垂らす白い紙へいぞく（「弊束」とか「御弊」と呼ばれる）は、稲光の様を表わしたもので、雨の恵みによって稲が成長するようにという祈りがこめられている、ということも賢治が教え子達に語ったという証言もある。「そらのエレキ」は稲を成長させる雨をもたらす雨雲ともなり、太陽や雨などの天の恵みによって地上の生命が育まれることを賢治は強く意識していた。

○「鳥はなく啼く青木のほづえ」―「ほづえ」は上の枝という意味、「なく啼く」と繰り返してリズムをもたせ、漢字、平仮名と表記を変えて変化をもたせた。「鳥」は次の行に出てくる「かくこどり」「青木」は同じく「やなぎ」であろう。

○「くもにやなぎのかくこどり」―雲の流れている空に一本、つきぬけるようにそびえるギンドロヤナギ、その天辺に止まってかつこうが鳴く、というような内容を名詞と助詞だけ並べて圧縮した表現。かつこうは好んで高い所に止まって鳴く。花巻、盛岡周辺では田植えの時期とカツコーがやってきて鳴く時期が重なっており、早苗を植えたばかりの田でかつこうの鳴く声をよく耳にする。「かくこどり」は閑古鳥ともいわれ、一般には「かつこう」（時鳥の雌とする説もある）という。ここでは五音にするため「かくこどり」としたのだろう。

五、②節の注解

○「雲がちぎれて日ざしが降れば／黄金の幻燈 草の青」―空をおおっていた雲が動き、雲間から日射しが射す。それが幻燈機から発せられた黄金の光線の束のように、早苗の青田を照らしている、という情景である。「幻燈」はマジック・ランタン (magic lantern) の訳語として明治の初めに、その名が普及、視覚教材として学校でも盛んに活用された。童話『雪渡り』の中で「狐小学校の幻燈会」が行われたとか、『やまなし』の中で「五月」と「十二月」の小さな谷川の底を写した二枚の青い「幻燈」が描かれるなど、賢治作品の重要な言葉となっている。

賢治は『春と修羅』について、「詩」ではなく「心象スケッチ」だと述べ（大正十四年二月九日付、森佐一宛書簡）、事実、詩集の扉にも「心象スケッチ 春と修羅 大正十一、二年」と記している。「心象」というのは「心理学的な仕事」（同書簡）をそこに、こめた作品ということだろうが、心の「幻燈」に映し出された風景、という意味合いも含んでいるのではなからうか。表題の次に括弧書きして添えられた英語は、文字通りに訳せば「修飾された心象風景」ということだが、肉眼でなく、知性や教養、感性、想像力などを含んだ賢治独自の「心眼」で見た風景、それを詩的に飾って表現したもの、とも考えられる。

○「気圏日本のひるまの底の泥にならべるくさの列」―「気圏」というのは、地球を包む大気の占める領域をすべてという言葉。賢治の愛用語の一つで、その巨きな宇宙意識に立って、地球を包む大気、その下にある日本、そしてその下に広がる岩手の青田、と層をなした形で把握していることの表われである。また「気層の底」とか「大気の底」というのも、賢治の特徴的な表現で、大気を時として、水溶液とみた賢治は、地表を大地の表面としてでなく、

海の底のように大気の「底」にあるもの、あるいはコロイドの沈んでいるように、空気の沈殿している「底」とみなした表現をしている。

○「泥にならべる草の列」―先入観（知識）に妨げられないで田圃を捉えてみるなら、早苗の列は、泥の中に草が並んで立っている姿ともいえよう。

六、③節の注解

○「日は銀の盤」―雲の奥にあって、鈍く輝く太陽を、太陽は銀色の円盤だ、と捉えた。なるほど、雲の奥に見える太陽は、銀盤のようである。

○「エレキづくりのかはやなぎ」―この一節だけで理解するのは難しい。短編『鳥をとるやなぎ』によると「煙山にエレッキのやなぎ」があると藤原慶次郎に言われ、二人でそれを見に行ったということが書かれている。多くの鳥がやなぎの木に吸い込まれる（実際には集まってくる）ことを、磁石のために引き寄せられる、とみたのである。

詩「楊林」にも「エレキに鳥をとるのみか」という一節がある。この場合エレキは電気そのものというより、電流が流れることによつて磁石となる「電磁石」と考えられる。ギンドロヤナギは「ブリキ」色に輝き、電磁石と想像するに叶っているが、この詩の場合、よくしなう「カワヤナギ」に鳥が群れていたのであろうか。

やなぎの木を風が吹きぬける時、ざわざわと鳴り、馬も黒びかりした身体を躍動させる。馬は現在、田畑で見かけることは全くないが、昭和三十年ごろまでは農耕馬として活躍しており、賢治も日常的にその姿を見ていた。南部は昔から名馬の産地としても知られており、賢治作品にも馬がよく登場する。

七、④節の注解

○「土のスープ」―稲を成長させる栄養分を含んだ泥水を「スープ」と喩えた。「稲がスープを飲んで成長する」というように、人間化した表現をしたものである。こうした喩え方は賢治の万物を人間的にみる、アニミズム的な感覚を反映するものであるが、教師として化学を教えている体験とも関係があるろう。「稲は土のスープをおいしく飲んで、どんどん成長するんです」などと語る賢治は、理科をわかり易く、親しみ深く教える名教師でもあった。

○「黒くをどりはひるまの燈籠」―田圃で働く農夫の影が水面に燈籠の影のように映っていることをいったもので、影絵のように黒く踊ってみえる、ということである。「をどりは」となっているが、文法的には「をどるは」とすべきで、誤植ではないかと思われる。

○「泥のコロイドその底に」―「コロイド」とは、こまかな微粒子が媒質と呼ばれる気体や液体、固体中に沈殿しないで浮き漂っている状態をいう。化学に親しんだ賢治ならではの表現であり、ここでは田圃の泥を、養分を含んだ、コロイド粒子の充満したものとみているわけである。「土のスープ」とか「泥のコロイド」という表現の中に「植物医師」、「稲の医師」であった賢治の稲作体験や、科学者としての知識もうかがわれる。

八、⑤節の注解

○「りんと立て立て」―移植されたばかりの、まだ、しだれている早苗に向かって、凜りんと男らしく、きりりと立つ

がよいと励まし、語りかける言葉である。考えようによっては、賢治の教え子達も「青い槍の葉」であり、その子供達がすすくと男らしく成長するようにという思いを掛けているとも解釈できる。事実、賢治の作品の中には、そうした教え子達へのエール、メッセージをこめた作品が散見する。

○「たれを刺さうの槍ぢやなし」―早苗を槍とたとえたことに関連して、明るい冗談を述べた言葉である（賢治は話の巧みな、ユーモラスな語り手であったという）。かつては、田の草取りをする時に、稲の葉で目を刺すので、細かな網をかぶって目を保護した。稲を槍の葉とたとえるのは誇張に過ぎるようにも思われるが、そうしたかつての稲作を思えば理解できる。それに「槍の葉」は、音の上からは「槍の刃」にも通じる。

○いちにち日がな―普通は「日がな一日」で、朝から晩まで、一日中の意。読んでみるとこの詩の場合、確かに「いちにち日がな」の方が調子がいい。

九、⑥節の注解

○「雲がちぎれてまた夜があけて」―雲が途切れて、そこから日ざしが降り注いでくる。それを「夜明け」と喩えて表現したもの。曇っていた空が、夜明けのように明るくなっていく気配である。

○「そらは黄水晶ひでりあめ」―黄水晶は、透明薄黄褐色の鉱物で、賢治は作品の中で「シトリン」とルビを施している。シトリンは、もともとシトロンの木からきたレモン色を指す言葉であるが、賢治は「シトリン」の語のもつ、さわやかなイメージを好んだのであろう。「こんな黄水晶シトリンの夕方」（詩「風景観察官」）や「黄水晶シトリンの薄明穹」（『まなづるとダアリヤ』）のように、夕焼けの空のイメージとして、この語を多く使っている。この詩の場合、雲が切れ、

夜明けのように空が明るくなった、その黄色味をおびた色を喩えたもの。その明るくなった空から日の光を浴びて、ばらばらと日照り雨が降ってくる。

○「風に霧ふくぶりきのやなぎ」―風に吹かれて霧が流れ、その中でやなぎの葉裏がブリキのように白く「しらしら」(普通は「しらじら」である)ひらめく。

十、⑦節の注解

○「そらはエレキの白い網」―空に白い雲がかかっている、というだけのことだが、それを「エレキ」をおびた雲、「しろい網」とイメージ化した。①節で雲がエレキを集めて流れていく、とした表現にもつながる。科学的な知識(言葉)が詩の中で何の違和感もなく、自然に詩語として伝わってくる。それは賢治が雲の「エレキ」を生き生きと感じとっていたからであろう。

○「かげとひかりの六月の底」―六月の大気の下、その六月の大気は雲によっておおわれて、翳るかと思うと、日が射して明るく地を照らす。翳と光の心象の世界であり、壮大にして詩的な把握である。

○「気圏日本の青野原」―六月の底に広がるもの、その気圏の底に広がるものは、早苗の青田である。視点を気圏(地球)―そして日本(世界の中の)―そして、今この目の前に広がる岩手の青田(日本の中の)と、大きな宇宙的意識から焦点をしないで絞り込んでいく、そうした表現法であり、賢治の目が今眼前に広がる風景を、直接は目に見えない「意識」(宇宙的意識)の世界から把握していることの一例である。

十一、新しい時代の田植え唄

この詩は『春と修羅』所収以前に、宗教団体「国柱会」の機関紙「天業民法」（大正十二年八月十六日）に発表された。その時の表題は「青い槍の葉（挿秧歌）」となっていた。括弧内の「秧」は稲の苗のことで、「挿秧」とは、田植え、「挿秧歌」とは田植え唄のことである。「挿秧」という言葉はあるにしても「挿秧歌」は賢治の作った言葉であろう。田植え唄なら岩手県内に幾つもあるし、まして賢治のころには、こうした作業唄、民謡が生活の中に生きていた。労働の中から詩や音楽、舞踊などの芸術が生まれてくることを賢治は民俗芸能を通して経験的に知っていた。それがやがて「農民芸術概論綱要」における主張、即ち労働と芸術が分化し、芸術が一部の専門家の手にゆだねられることによって墮落したのだという批判につながっていく。こうした主張は、自ら「田植え唄」として、「青い槍の葉」のような作品を作っていたことと無縁ではあるまい。

ここで参考までに、(A) 遠野地方に伝わる田植歌と (B) 胆沢地方のそれを紹介しておく。

(A) サアーヤーハイ 朝よはかの水口 水口ヤーハイ もみは千石より来る

サアーヤーハイ 今日ひのひるの遅さよ 遅さよヤーハイ かぎづけの緒でも切れたかな

サアーヤーハイ 今日腰の病めるも 病めるもヤーハイ 二十やぜにの たりだ

サアーヤーハイ 今日田の田主は たろじ 田主はヤーハイ 厚田を好む田主だ

サアーヤーハイ 今日日晩になる 晩になるヤーハイ おいとま申すと田の神

青い檜の葉

宮沢賢治・作詞
(作曲者 未詳)

ゆれる ゆれる やなぎは ゆれる
くもは くるくる みなみの ちへい
そらの エレキを よせてく る
とりは なくな く あ おきーの ほづ え
くもに やなぎの かくこど り

(B) ハアー 西根山ナー お駒ヶ岳の 白い雪 雪とけてナー 流るる水は胆沢川
ハアー 西根山ナー 見上げてみれば お舟形
見下せばナー 江の島 沖の帆かけ舟

すでに述べたように「青い檜の葉」が作られたのは、

大正十一年の六月、賢治は稗貫農学校に勤めて半年という、ういういしい青年教師である。この年の三月には「精神歌」を作詞、作曲を川村悟郎に依頼し、同僚の堀籠文之進と共にこれに手を加えて完成させ、生徒達に歌わせている。農民達が田植え唄を歌って労働の辛さを忘れ、共に喜んだように、賢治も農学校の教え子達にこの詩を歌わせて、田植えという（あるいは広く農業という）辛い仕事を、共に楽しいものにしてしようとしたのであろう。

賢治の教え子、平来作と藤原嘉藤治の歌唱指導を間接的に受けたとされる薬師寺慶子が、昭和九年花巻高等女学校創立二十五周年記念学芸会でこれを独唱した。その薬師寺の口唱を佐藤泰平が採譜したものが新校本全集に載っているのです、これを上に紹介しておく。

少し大胆な想像かもしれないが、「ゆれるゆれる」という括弧書きは民謡の間あひ（合・相とも表記する）のように大勢に歌わせ、それ以外の部分を一人が歌う、ということを経治は考えていたのかもしれない。この詩は単に文字として記された詩ではなく、賢治の心の中で、新しい時代の田植え唄として共に歌い、踊り、楽しむものだったのであろうか。「ゆれるゆれる」というフレーズに、いかにも田植踊のような舞踊のイメージが感じられるのである。

農民の生み育てた田植え唄は、先程その例を紹介したのでわかるようにきわめて素朴なものだが、賢治はこれを、その豊かな教養と感性によって、「イーハトーボ農学校」の田植え唄とした。泥のコロイド、その養分をスープレのように吸って成長する稲、太陽の陽ざしや雨を恵みとして成長する稲、その稲の成長を祈る心。自然に対する畏敬の念と科学的な知識がここでは何の違和感もなく自然に結びついている。それはイーハトーボの田園賛美の歌ともなり、この地にあつて教え子達と共に働く、農に生きることの喜びを告げているようである。

（参考） 盛岡弁訳

「青い槍の葉」は標準語で書かれている。そのあまりに個性的にして豊富な語彙、賢治独特のイメージーションなどを伝えるには、そうでなくてはならなかったであろう。しかし、それゆえにかえって賢治が望んだように多くの民衆、農民の歌とはなりえなかった。標準語で記したところには、生徒達や農民と同じ地平に立つのではなく、教師として、ものを教え、あるいは導こうとする意識もひそんでいるようだ。

これを盛岡弁で、同じ仲間同士の日常の言葉に訳してみたらどうなるか、一つの試案として、次の詩を読んで頂

ければと思う。

あうえやりのはっぱ

① (ゆれるゆれる やなぎあ ゆれる)

くもあくるくる みなみのほうから

そらのでんきは よせでくる

とりあ ながなく あおきのてっぺんこ

くもさ やなぎの かっこーだ

② (ゆれる ゆれる やなぎあゆれる)

くもあ つぎれで ひざしこさせば

きんのげんとだ くさああうえ

きけんにほんの まっぴるま

きけんのそごあ ひろがつて

どろさならんだ くさのれつ

③ (ゆれる ゆれる やなぎあゆれる)

くもあくくるくる おでんとあぎんばん
でんきでできた かわやなぎ
かぜあすぎれば じゃわじゃわなって
んまもはねまって くるびがり

④ (ゆれる ゆれる やなぎあゆれる)
くもあ きれだが まだひざしこあふって
つぢのおづげど くさのれつ
くろぐおどるのあ とうろのかげだ
どろのつぶつぶ そのそごさ

⑤ (ゆれる ゆれる やなぎあゆれる)
りんとたでたで あうえやりのはっぱ
だれえさすべつと すもさねえやりだ
ひがりのそごで いぢにぢいっぺ
どろさならんだ くさのれつ

⑥ (ゆれる ゆれる やなぎあゆれる)

くもあつぎれで まだよああげで

そらあ シトリンのおでんとさんだ

ひでりのあめっこきらきらど

かじえにふがれで きりこもながれ

ぶりきのやなぎあゆれでらよ

⑦ (ゆれる ゆれる やなぎあゆれる)

りんとたでたで あうえやりのはっぱ

そらあ でんきの しれえあみ

かげど ひかりの ろぐがづだ

きけんのそごのにつぼんの

どごまでひろがるあおのはら

岩手イーハトーヴの のああうえ

(ゆれる ゆれる やなぎあ ゆれる)

(注、必ずしも原詩通りではない。)